

枚方市SC (大阪府)

和服をリフォームして作品製作

枚方市SCでは、「和服リフォーム同好会」が平成6年に発足。市民から提供される和服を素材に、洋服やバッグなどの小物へ作り替え、リフォーム品を製作している。



枚方市SCでは、同好会活動が活発だ。「和服リフォーム同好会」は毎週月曜日と木曜日にメンバーが集まり、作業室で活動を行っている

公益社団法人枚方市シルバー人材センターでは、パソコンやゴルフ、俳句、ウォーキング、写真など多くの同好会が活動している。今回はその中でも、今年で発足から30年を迎えたという「和服リフォーム同好会」(以下、同好会)を取材した。

たんすに眠る和服を よみがえらせる

同好会が始まったのは平成6年のこと。時代の流れとともに和服に袖を通す機会が減り、「たんすにしまったままだけれど、捨てるのはもったいない」という人も多いのではないだろうか。同好会ではそんな和服を集め、別の品物へとリフォーム。同活動を口コミで知った市民からの和服の提供も多く、枚方市SCの施設内にある作業室には、たくさんのお古着が保管されている。会員たちはそれらを1着ずつほどいて洗濯し、新たな作品へとよみがえらせていく。



取材日に活動していた6人のメンバー。写真前列左から皿谷豊子さん、清水照子さん、光本裕子さん。後列左から島田典子さん、小崎トミ子さん、山田美代子さん



作業室にたくさん保管されている和服の一部。市民などから、無償で提供されている



着物の帯の芯を抜く光本さん。湿気がたまりやすい箇所だそうで、カビや傷がないかもチェック

高い縫製技術と アイデアで作品作り

リフォームは和服をほどこところから始まる。糸切りはさみなどを使って1枚1枚、手作業で表生地と裏生地を外していく。解体した後、アイロンを当てることで作品作りの材料となる生地になる。そこから洋服やバッグなど、さまざまに品物へと生まれ変わる。

同好会の発足当初は作務衣やはんなりなどにリフォームすることが多かったが、時代とともに作品のバリエーションが次第に増え、最近ではスマートフォンが入るサイズのポシェットなども登場。お客様の需要や世の中のトレンド情報も参考に、どんなものを作るか会員同士がアイデアを出し合っているという。また、会員の中には洋裁や和裁の経験者もいる。経験の年数や有無を問わず、縫製技術も会員同士がお互いに教え合い、



和服の生地は丁寧到手洗いし、汚れをしっかりと落としておく。洗濯後にアイロンを当てる清水さん



生地に型紙を合わせる島田さん。本などを参考に、型紙どおりにカットしていく



着物をほどこく皿谷さん。生地を傷つけないよう細心の注意を払う

質の高い作品作りに努めている。

令和6年2月から参加しているという会員の島田典子さんも和裁経験者の1人。「同好会に入ってから先輩の会員に教えてもらうことも多く、技術の幅が広がりました。たんすに眠る和服や活用できずもつたいたいと思っていた端切れが作品として生き返るのがうれしいです」と話す。

また、同好会に入って10年以上たつという皿谷豊子さんも長年紳士服の仕立ての職に就いていたという縫製経験者。「古着の再生には傷や染みがないかなど気を使います。常に頭と手先を使うので、ぼけ防止にもなっています」と、活動が心身の健康にもつながっていることを教えてくれた。

活動時間が会員の楽しみに

同好会には現在10人の会員が在籍。毎週月曜日と木曜日の9時から15時に作業室に集まり活動している。時間は目安で、会員が無理



ミシンをかける小崎さん。会員が各自で裁縫道具を持ち寄るほか、ここではミシンなどの道具もそろそろ。作業室には歴代の会員が寄付したというミシンが3台置かれている



浴衣のリフォームについて相談する山田さん(写真右)と清水さん。会員同士で知識や技術を教え合う



リフォームで完成した洋服。ブラウスやコートなど、1000~5000円程度の値段が付けられる

なく続けられるように基本は自由参加だ。それでもほとんどの会員が、週に2回参加して活動しているという。

「もともと趣味で洋裁をしていたところ、友人から『こんな会があるよ』と教えてもらいました」とは、メンバーの清水照子さん。

「まさかこの年になって、こんな活動ができると思っていませんでした。共通の趣味を持つ仲間とわいわいお話しできる時間も楽しいです」と笑顔で話してくれた。

「いづく処」や イベントで作品を販売

今年7月、枚方市SCでは、令和5年7月に開園したセンターが運営する農園「ふくろうファーム」で栽培した野菜の販売を目的に、地域の人々が気軽に立ち寄れる「いづく処」をオープンさせた。農園に隣接しており、採れたての新鮮な野菜が買えるほか、同好会の作品も常設している。これまでも



リュックサックやトートバッグなどのバッグ類は面積が大きい分、和服の柄を活かしたり、デザインを工夫したりとアイデアが必要になる



スマートフォンが入る便利なポシェットやポーチなど。色や柄の合わせを考えるのも楽しい作業とのこと

令和6年7月にオープンした「いっぶく処」。使用している古民家の内装は、枚方市SCの会員が自分たちでリフォームした

「いっぶく処」内の一角に作品をずらりとディスプレイ。1か月に1度、作品の入れ替えと補充が行われる



地域のイベントに参加して販売する機会があったが、新たな販売の場ができたことでいつでも作品を手にとってもらえるようになった。「近年はコロナ禍でイベントがなくなり、長年続けていた会員が辞めるなどメンバーも減って、同好会の活動自体が危ぶまれる状況でした」と、植田健作常任理事兼事務局長は振り返る。「最近はずつ新しいメンバーも増え、いっぶく処での販売が始まったことで会員のモチベーションも上がりました。また、来年の『2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)』にセンターが参加することが決まっています。ファッションショーを行うなど、同好会でも何かできないかを検討していく予定です。歴史のある同好会なので、和服を使ってリフォーム作品を作るスタイルを守りながら、今後も新旧メンバーで新しいことにも挑戦できたら」と熱い思いを語ってくれた。

(林真央)